〔好色二代男六〕帶は紫の塵人手を握る

此里○京都島原は早駕籠、大坂より四枚肩は二十四匁の定まり、難波の暮の七つに乗出し、西島の四つ門閉ぬ中に、請合ひ飛ばすなり、又六枚肩は三十六文、是は日暮より二時に、十里半の道を行く事ぞかし、

〔人倫訓蒙圖彙三〕駕籠借　都鄙の者是をいとなむ、當所なき時は、辻々に立居て、往還の貴賤に、駕籠やりませうといふもむつかしき業也、乘せるとひとしく肩にかけるより、何ぞに付て乘手に咄しをゝかけ、只口なしに行は、是を己が力にして行也、それとは知ず、野火なる乘手、氣作なる男哉と思ひて、乘手より調子にかゝつて咄せば、知ぬ事なふ、間に合の空言を出るにまかせて積也、扨は相肩の互の咄しに、昨日の乘手は、奇麗な旦那にて錢を下されたが、其樣な仕合にまだ逢ぬなどいひ、又は、そいつは、ゝわいやつではなかつたかなんど、乘てにきをもたするゝかけ、頓而此方には通てをるとも知ず、又己が同志、きり、ばんどう、ぶり、ざいなん、ろうぢなど云ことばゝ、定てわけこそあるらめ、分て下品の業也、相てにすべからず、

〔嬉遊笑覽九娼妓〕此○京都島原に通ふ遊客、むかしは駕籠なく、みな步行にてありしとぞ、古畫を見ても、ゝらる、後世人驕り駕籠にて通ふことゝなり、その家を中宿とし、音信の便理となる、一目千軒に云、或者駕舁をかゝへ置かよひけるが、行けといはゞ、いづく迄もゆくべし、おろせといはゞ、おろせよといひしより、駕舁ものを卸と異名するとなり、今おろせは駕はかゝず、かごを廻すものなり、かご舁は別にあり、此内にてかご自由をなす故、島原かごと人々呼なり、其外町にても駕人足を出す所、みなおろせなりといへり、おろせの名義、いとおかし、按るに、○喜多村信節卸は駕籠に乘は侈奢の至りなれば、かご舁ととなふることをはゞかりて、異名を呼しものなり、字書に、舍車解馬、脫衣、解甲、皆曰卸、今舟人出載亦曰卸など見えたり、すべてつみ載たる物を下す事なれば、唯荷物の